

## 柴田政利先生の古稀をお祝いして

明治大学総長 宮 崎 繁 樹

いつも若々しく積極的にお仕事をしておられるので、まだまだと思っておりましたのに、この度、柴田政利先生が古稀をお迎えになった由を承り、驚きますと共に、お喜び申し上げます。<sup>1</sup>

柴田先生は、私にとって軍の学校の先輩にあたります。JR市ヶ谷駅の濠をはさんで北方の高台が「市ヶ谷台」とよばれ、現在自衛隊が駐屯しています。戦後一時「明治大学が移転したら」という話もあった場所で、近く防衛庁が全面的に移転する予定と聞きます。

1939年(昭和14年)桜咲く4月に私は、この市ヶ谷台の現在アジア経済研究所がある付近にあった校舎に、東京陸軍幼年学校西分校の生徒として入学致しました。当時ここには陸軍予科士官学校があり、陸士第55期生が在籍しておられました。その中に柴田先生もおられたのです。時計台の上から響く同じ起床ラッパで起き、同じ消灯ラッパで寝る生活を一年間共にさせて頂いたのです。学科教育も術科訓練も勿論別で、私たちは、いわば兵隊ゴッコに近いものでしたが、3年先輩の予科生徒の「一人前」のきびしい訓練に目を見はったものでした。のちに極東国際軍事裁判所の法廷にもなった大講堂で、時々催される映画の映写会などは一緒に見せて頂き、日曜外出の時などは、55期生の凛々しい正装姿に感服したものです。

柴田先生は、1940年3月同校卒業後、工兵の部隊に配属され、士官候補生としての隊附教育のあと、相武台にある士官学校(本科)の教育を受け、戦時下であったために繰上げて1941年7月に同校を御卒業になり、創設後間もない「船舶工兵」の見習士官として中国に赴任され、その後少尉に任官、小隊長、中隊長勤務をへて、東部ニューギニアで大尉で終戦を迎えられたはずです。私は3期後輩の58期生で、1943年12月に甲府の東部第63部隊に隊附勤務を致しましたが、その時の訓育中隊長が柴田先生と同期の55期生の方でした。

私は、千葉の九十九里浜で終戦を迎え、比較的早く復員出来ましたので、翌年1946年の4月に明治大学法学部に入学出来ましたが、柴田先生は、外地で終戦をお迎えになられたので復員帰国が遅くなられたことなどの事情もあり、1948年4月に政治経済学部に入學されたのだと思います。私は現役将校とはいっても、8月1日に少尉任官で15日には敗戦という思えば形だけの軍隊勤務でしたが、柴田先生は、戦地で何百人もの部下を持つ中隊長として実際に激戦を経験された歴戦の現役将校であられたのですから「筋金入り」の部隊長だったわけです。

それだけに柴田先生の終戦時の御苦悩や引揚時の御苦勞、新たに大学生活をお始めになる決意も大きかったことと拝察致します。

国家至上主義、天皇神格化の皇国史観を軸に、軍人勅諭、戦陣訓で教育を受けた戦前の教育と、民主主義、平和主義、国民主権を軸にした戦後思潮とは全く異質のものであり、二つの全く別の世界に生きるという得がたい経験を私たちの世代はしているわけですが、実戦を指揮官として経

験されているだけに、柴田先生には、特にこの思いが深かったのではないかと拝察する次第です。

柴田先生は、1951年に政治経済学部を御卒業になったあと、すぐに大学院の商学研究科にお進みになり、商学部の助手をへて、1955年5月に商学部の講師をおつとめになり、以後、助教授、教授に昇任して今日にいたっておられますが、1967年6月には、外国為替相場と対外投資に関する研究により、商学博士の学位を授与されておられます。

同じ大学におりまして、学部が異なると接触申し上げる機会は案外少ないものです。私も残念なことに学内で柴田先生の讐咳に接することはあまりございませんでした。

しかし、印象に残っていることが二回ございます。

その一つは、柴田先生が1973年4月から学生部長をおつとめになるに先立ち、学長となられた小牧正道先生、原正彦先生とお揃いで世田谷の拙宅までお越し頂いた時のことです。お話の内容は、私に教務部長をつとめるようにとのお誘いでもございました。もし、その時そのお話をお受けしていれば、柴田先生と手をたずさえて大学のお仕事が出来、それを通じて、色々と先生から御指導をお受けすることが可能だったと思われませんが、当時私は自分の専攻分野の研究だけで手一杯で、折角じゅんじゅんと情理を尽しておすすめ頂いた柴田先生のお話をお断りしたことを申し訳なく思っております。

その二は、短期大学におられた中原精一先生が責任者となり「アフリカ研究」を社会科学研究所の総合研究として進めることになり、柴田先生、川上やまと先生、播里枝先生たちと共同研究をすることになった時のことでした。残念なことにその研究成果は公表されないままで終わったのですが、その過程で、柴田先生の学問的な厳しい態度には、改めて敬服した次第です。

柴田先生は、明治大学の中では学生部長のほか、商学科長、商学研究科委員長をつとめられ、また数多くの著書、論文を執筆されて、学界にも多くの貢献をされ、熱心に学生を指導されておられますが、対外的にも、アジア・アフリカ研究所のお仕事など、多くの功績を残されました。さらに明治大学教職員組合の委員長、私教連の委員長としてもつとに令名高く、教育にたずさわる勤労者、教職員のために力を尽して来られました。

1992年4月から思いがけず私は学校法人明治大学の設置する学校の教育を総括する仕事を引受けることになり、在職中原正彦先生共々理事もつとめることになりました。そのために、はじめて教職員組合とのいわゆる春闘の団体交渉に、他の理事の方と出席することになったのですが、席についてみると拡大執行委員会の側に、何と柴田先生がおられ、いささか困りました。先生は理路整然とベース・アップの正当性を述べられ、学内事情や従来のにきさつに通曉しておられるのに、私は新米の上に従来为学校行政やにきさつには無知で、冷汗をかき通してました。しかし、その交渉を通じても色々のことを先生にお教え頂いたことを有難く存じました。来年からは先生のこのお元気な気魄のこもった発言を、この団交の場ではお聞きできなくなるのかなと思うと、ふと寂しくも思った次第でした。

先生が古稀をお迎えになることは、冒頭にも記しましたように喜ばしいことでございますが、これを機に定年で明治大学の専任教授としては去られることは、定めとはいえ、寂しいことです。

しかし、先生が心身共に御健康で、今後とも学界におきましても、学内におきましても、研究、教育、社会活動全般にわたりまして、引続き御活躍いただき、後進を御指導頂きますよう心からお願い申し上げます。

この度、明大商学論叢の記念号として、「柴田政利教授古稀記念論文集」が発行せらるるにあたり、お求めにより、お祝いの辞を記させて頂きました。この機会をお与え頂きましたことに、御礼申し上げます。